

六本木クロッシング2022展：往来オーライ！

2022年12月1日(木)ー2023年3月26日(日) 森美術館(六本木ヒルズ森タワー53階)

いま、日本の現代アートが映し出す 人・文化・自然のカラフルな交差

森美術館は、2022年12月1日(木)から2023年3月26日(日)まで、「六本木クロッシング2022展：往来オーライ！」を開催します。

「六本木クロッシング」は、森美術館が3年に一度、日本の現代アートシーンを総覧する定点観測的な展覧会として、2004年以来共同キュレーション形式で開催してきたシリーズ展です。第7回目となる今回は、1940年代～1990年代生まれの日本のアーティスト22組を紹介します。既に国際的な活躍が目覚ましいアーティストたちから今後の活躍が期待される新進気鋭の若手まで、創造活動の交差点となる展覧会です。

長引くコロナ禍により私たちの生活は大きく変化し、これまで見えにくかったさまざまな事象が日本社会の中で顕在化しました。以前はあたりまえのように受け入れていた身近な物事や生活環境を見つめ直すようになったり、共にこの怒涛の時代を生きる隣人たちの存在とその多様さを強く意識するようになりました。そして今後、人流が回復し新たな文化の展開が期待されるなか、あらためて現在の「日本」にはさまざまな民族が共生し、この地に塗り重ねられた歴史や文化が実はすでに色とりどりであることについて、再考が求められるでしょう。その先に私たちはどのような未来を想像し、また共に作っていくことができるのでしょうか。

サブタイトルの「往来オーライ！」には、歴史上、異文化との交流や人の往来が繰り返され、複雑な過去を経て、現在の日本には多様な人・文化が共存しているという事実を再認識しつつ、コロナ禍で途絶えてしまった人々の往来を再び取り戻したい、という思いが込められています。

このような文脈において、日本の現代美術やクリエーションとは何かをあらためて広い視野から検証し、先の見えない明日をみなさんと一緒に考えたいと思います。



〈左〉
O JUN
《美しき天然》
2019年
油彩、キャンバス
350×240 cm
Courtesy: ミヅマアートギャラリー(東京)

〈右〉
SIDE CORE / EVERYDAY HOLIDAY SQUAD
《ロードワーク》
2017年
工事用照明器具、単管、チェーン、カラーコーン、
ヘルメット、作業着、ビデオ、ほか
サイズ可変
撮影：後藤秀二
画像提供：リボーンアート・フェスティバル2017(宮城)

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、花上
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

出展アーティスト

*アーティスト名のアルファベット順
*出展アーティストは変更となる可能性があります。

AKI INOMATA	(1983年東京生まれ、同地在住)
青木千絵	(1981年岐阜生まれ、石川在住)
青木野枝	(1958年東京生まれ、埼玉在住)
潘逸舟(ハン・イシュ)	(1987年上海生まれ、東京在住)
市原えつこ	(1988年愛知生まれ、東京在住)
伊波リンダ	(1979年沖縄生まれ、同地在住)
池田宏	(1981年佐賀生まれ、東京在住)
猪瀬直哉	(1988年神奈川生まれ、ロンドン在住)
石垣克子	(1967年沖縄生まれ、同地在住)
石内都	(1947年群馬生まれ、同地在住)
金川晋吾	(1981年京都生まれ、東京在住)
キュンチョメ	(2011年結成、東京拠点)
松田修	(1979年兵庫生まれ、東京在住)
呉夏枝(オ・ハヂ)	(1976年大阪生まれ、オーストラリア、ウロンゴン在住)
○JUN	(1956年東京生まれ、同地在住)
折元立身	(1946年神奈川生まれ、同地在住)
進藤冬華	(1975年北海道生まれ、同地在住)
SIDE CORE / EVERYDAY HOLIDAY SQUAD	(2012年/2015年結成、東京拠点)
竹内公太	(1982年兵庫生まれ、福島在住)
玉山拓郎	(1990年岐阜生まれ、東京在住)
やんツー	(1984年神奈川生まれ、千葉/神奈川在住)
横山奈美	(1986年岐阜生まれ、愛知在住)



AKI INOMATA
《彫刻のつくりかた》
2018年-
インスタレーション
サイズ可変
Courtesy: 公益財団法人 現代芸術振興財団(東京)
展示風景: 「彫刻のつくりかた」公益財団法人 現代芸術振興
財団 事務局(東京)2021年
撮影: 木奥恵三

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、花上
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

開催概要

展覧会名:「六本木クロッシング2022展:往来オーライ!」

主催: 森美術館

企画: 天野太郎(東京オペラシティアートギャラリー チーフ・キュレーター)、
レーナ・フリッチュ(オックスフォード大学アシュモレアン美術博物館 近現代美術キュレーター)、
橋本 梓(国立国際美術館主任研究員)、
近藤健一(森美術館シニア・キュレーター)

会期: 2022年12月1日(木)–2023年3月26日(日)

会場: 森美術館(東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53階)

開館時間: 10:00-22:00(火曜日のみ17:00まで、ただし1月3日[火]、3月21日[火・祝]は22:00まで)

* 入館は閉館時間の30分前まで * 会期中無休

* 当館の新型コロナウイルス感染症対策への取り組みについてはウェブサイトでご確認ください。

<https://art-view.roppongihills.com/jp/info/countermeasures/index.html>

入館料:

	[平日]		[土・日・休日]	
	当日窓口	オンライン	当日窓口	オンライン
一般	1,800円	1,600円	2,000円	1,800円
学生(高校・大学生)	1,200円	1,100円	1,300円	1,200円
子供(4歳~中学生)	600円	500円	700円	600円
シニア(65歳以上)	1,500円	1,300円	1,700円	1,500円

* 事前予約制(日時指定券)を導入しています。専用オンラインサイトから「日時指定券」の購入が可能です。日時指定券の販売開始日は決まり次第ウェブサイトでお知らせします。

* 当日、日時指定枠に空きがある場合は、事前予約なしでご入館いただけます。

* 表示料金は消費税込

* 東京シティビュー(屋内展望台)、スカイデッキ(屋上展望台)、森アートセンターギャラリーへの入館は別料金になります。

* 本展のチケットで、同時開催プログラムもご鑑賞いただけます。

同時開催:「MAMコレクション016:自然を瞑想する—久門剛史、ポー・ポー、梅津庸一」

「MAMスクリーン017:ナンシー・ホルト、ロバート・スミッソン」

「MAMプロジェクト030×MAMデジタル:山内祥太」

一般のお問い合わせ: Tel:050-5541-8600(ハローダイヤル)

森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、花上

Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

本展を紐解く3つの鍵： コロナ禍を経て、浮かび上がる社会像を考察する

本展のキュレーター4人のコロナ禍を起点とする議論により、2022年の今、考察すべき3つのトピックで展覧会を構成します。

1. 新たな視点で身近な事象や生活環境を考える

コロナ禍により、私たちは身近な事象や生活環境をより強く意識するようになりました。これは、東日本大震災を経た日本で、自然や環境について関心が高まったことの延長線上にあると言えるでしょう。そんな意識を通じて、私たちは未来を考えることが求められています。

本展では、AKI INOMATAによるビーバーにかじられた木材を基に制作された立体作品シリーズ、コロナ禍での生活環境の変化を起点に奇想天外な未来を志向する市原えつこ、身近な環境を変容させるインスタレーションを発表する玉山拓郎、青木野枝による自然現象に想を得た大型立体作品、竹内公太が福島県の放射能汚染による立入制限区域で撮影した写真を含むインスタレーションなどを紹介します。



市原えつこ+ ISID イノラボ
《都市のナマハゲ - Namahage in Tokyo》
2017年 VRゴーグル、ドローン、防毒マスク、電子パーツ、
プラモデル、ミノ、ほか サイズ可変
※参考図版



青木野枝 《ふりそそぐものたち/長崎》 2019年
鉄、ガラス 580×1,370×1,500 cm
展示風景:「ふりそそぐものたち」長崎県美術館 2019年
撮影:山本 糾 画像提供: ANOMALY(東京)
※参考図版

2. さまざまな隣人と共に生きる

今、遠隔のコミュニケーションにより働き方の選択肢が増えたり、多拠点生活が可能になっています。このようにコロナ禍がもたらした変化は、個々人の属性や家庭環境、社会的状況によりさまざまであり、多様な隣人がいることに気づかされました。

本展では、変わりゆく世界を見つめながら、さまざまな隣人たちを描くO JUNの絵画、失踪していた伯母と再会し、その後の姿を撮影し続けた金川晋吾によるポートレート写真、キュンチョメによるトランスジェンダーを主題とした映像作品などを紹介します。「ダイバーシティ」や「LGBTQ+」という言葉を意識した取り組みが加速度的に増える一方で、そうした言葉の影に隠されてしまうもっと見えにくい差異も含めて、さまざまな人たちが共に暮らす今日の社会の姿を考察します。



金川晋吾 《長い間》 2011年
インクジェットプリント 28.3×35.7 cm



キュンチョメ 《声枯れるまで》 2019年 ビデオ 32分

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、花上
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

3. 日本の中の多文化性に光をあてる

コロナ禍で海外からの人流が途絶えたにもかかわらず、海外にルーツを持ちつつ日本で生活している人たちの姿を日常的に目にします。インバウンド・ブームの陰で見えにくくなっていた、この国には多様な民族が共生しているという事実がより見えやすくなったといえるでしょう。顧みれば現在の日本は、アイヌや沖縄、中国系、コリア系といったさまざまな人々が、政治的变化や複雑な歴史を経て共に暮らす場となっています。昨今、世界中で民族・文化的に周縁とされてきたものに対する再評価の動きがあるなかで、連綿と続いてきた日本の中の文化的多様性に光をあて、新しい時代を共に考える必然性があるのではないのでしょうか？

本展では、池田宏によるアイヌの人々を主題とした映像インスタレーション、住み慣れた場所を離れる最後の時間を撮影した石内都の写真作品、海路による人々の往来を主題にテキスタイルで物語を紡ぎ出す呉夏枝や潘逸舟による移住・移転をテーマにした作品、石垣克子と伊波リンダという沖縄出身のアーティストによる作品などを紹介します。



池田 宏
《椎久慎介 標津町2022年7月》
2022年
デジタルデータ
サイズ可変



呉 夏枝(オ・ハチ)
《空白いろのきおくに浮かぶ海女の家／船》
2018年
金沢で集めた古着や布(麻長襦袢、木綿晒など)、亜麻、
陶器重り、釣針、サイアノタイププリント
サイズ可変
展示風景：「東アジア文化都市2018金沢 変容する家」金沢
21世紀美術館
撮影：木奥恵三
※参考図版

最新のプレス画像は、こちらのURLより申請、ダウンロードいただけます。

<https://tayori.com/f/roppongicrossing2022/>

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、花上
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp